

# 虚の筏

洪水企画 2012.4.12

1

無題 (titleless)

伊武トーマ

檻  
崩れた壁  
打ちっ放しのコンクリートの床に  
凍りついた肉片  
終わりのない始まり  
錆びた鉄柵を抜ける風  
冬の訪れを告げるひとひらの雪が  
檻の中へと迷い込む  
鉄柵の向こう  
傷だらけのオオカミが背を向け  
深い森へと入って行った：  
私は檻の外にいないのではない  
紛れもなく檻の中にいるのだ  
外は雪  
絶滅したはずの  
オオカミの遠吠えが聞こえる

(まだこれからなのよ)

小島きみ子

神のみわざのように  
なにかに触れたように思えるように  
そんなことをやって見せたいね  
(あのことみたいに?)  
それはすぐに消えてしまったけれど  
あれはなんだったのだろう  
きゆうに心に沸き起こって  
そのことを知っていたのに  
(忘れてはいないよ)  
掠れた彼女の声はうつくしかった  
彼女は花瓶の水をとりかえる  
古風な鶏頭の花瓶を見ていると  
これはね母の趣味  
わたしたちは笑いあった  
(まだこれからなのよ)  
ふたたび彼女は振り返って言った  
それはまだあかなくて彼女がもう一度笑っている声かして振り返った  
わたしたちはきつとできるだろうと思う  
弱いけれど  
貧しいけれど  
きつとできると思う  
なにかに触れたようにあたたかい気持ちがわきおこること  
そのことを



ウィーク・エンド

藤原ジュン

GW最終日の午後 まだ晴々の青空の下  
通りを挟む商店街は 色とりどりの賑やかさ  
赤レンガの歩道を 行き交う人たちに紛れて  
買い物をすつかり膨らませた僕たちは  
むこうから来る黒い服の人の姿に気がついた  
コートを靡かせ 長髪の奥に不敵な笑みを浮かべて  
前進してくる その片手には黒いステッキが握られている  
その男の後ろには サングラスをかけた黒いスーツ姿の男  
片手に開いた黒い本を読みながら スマートにやってくる  
彼の後ろからは ストレートの黒髪に黒い革ジャン姿の女  
女が抱え鳴らすエレキギターの色はまさに紅一点で  
続いて現れたのは 中東の黒い一枚衣をまとった男  
肩に担ぐのは鉄棒の量り竿で 人々に声をかけながら来る  
最後に現れたのは 時代錯誤にも黒い和服を着た男  
剃き出しの日本刀を片手に 眼光鋭くずんずんと歩き来る  
五人全員が白磁同然につるつるとした白い肌だ  
行き交う人たちに紛れて ちらちらと現れては  
遠くから 音も無くやってくる 黒装束の一群  
近づいても その弦の音も 声かけも聞こえず  
ほんの数人が はつと振りむいて青ざめる他は  
ほとんどが気づかずに 五人を通り過ぎていく  
この異常に 気がつく人なら 気がつくはずだ  
人波の中 どうどうたる風情で直進してくる彼らは  
ぶつかる人々の体を 通り抜けて来ているのだから  
もうそばまで来た すれ違いざまに目をつぶり  
軽く頭を下げて見た 五人の足下には影がなかった  
立ち止った僕たちは 啞然とした顔を見合わせた  
いくら何でも あんな類の行進は見たことがない  
お化けの世界でも コスプレとか流行っているのか  
などと言いたい 振りかえって様子を見ると  
遠ざかる五人の先には 電波塔がそびえていた  
いつの間にか 中東服の男がこちらを見ていて  
重そうな量り竿を軽々と持ち上げてみせた その時  
「…いちでなり」と声が 僕たちの胸に熱く聞こえた  
すると 和服の男が振りむきざまに刀を一振りした  
青ざめた僕たちを尻目に 黒い列は直進していった  
再び塔をおおいだ僕たちは 買い物袋を揺らして駐車場へ急いだ  
そろそろ暗くなり始める できるだけ早くこの街を出たら  
レストランで食事を終えても 今夜は一緒に過ごしていよう  
しばらくテレビもラジオも控えて 将来のことでも話していよう。

週間天気予報

池田 康

名古屋から那覇  
天気図が動く  
大風の日  
種が飛ぶ  
骨が飛ぶ  
那覇から名古屋  
瞳が動く  
正夢の朝  
雷雲が飛ぶ  
手紙が飛ぶ  
名古屋から那覇  
陽炎が動く  
空瓶の午  
ヨットが飛ぶ  
暦が飛ぶ  
那覇から名古屋  
駒が動く  
水盤の夜  
足跡が飛ぶ  
予言が飛ぶ  
名古屋から那覇  
南海が動く  
花の紀元  
物理学が飛ぶ  
歌声が飛ぶ  
那覇から名古屋  
針が動く  
古戦場の現在  
衛星が飛ぶ  
魂魄が飛ぶ  
札幌から東京  
曇りのち雨のち晴

詩の筏という研究会をときおり開催しているが距離の問題もあり参加できない人も出てくる。そうした詩人たちの参加もえるべく「虚の筏」は計画された。次号以降ますます充実できればと思っている。今回の執筆者の所在地を記すと、伊武トーマー福島県福島市、小島きみ子ー長野県佐久市、藤原ジュンー佐賀県佐賀市、池田および発行元の洪水企画は愛知県名古屋市中区である。(池田康)